

特32

754

改正
畫入

奈良名所記

繪圖屋莊原編
塚田武馬增冊

全

繪圖屋莊八原編
塚田武馬増刪

改正
奈良名所記

明治廿六年一月刻成

754
此の書は、
奈良名所記の
原編を、
繪圖屋莊八原
が、
武馬が、
増刪したる
ものである。
明治廿六年
一月刻成。
此の書は、
奈良名所記
の原編を、
繪圖屋莊八
原が、
武馬が、
増刪したる
ものである。
明治廿六年
一月刻成。

あり「うちらとす橋よみ色のくもいさかきまの神代もなを
ぞまひ▲二の倉屋、倉屋を右のむがと七布と五本とあり
「倉屋くら右もたらまの来るれやあつまりまをへく四方
の神く」▲後戸社せせりつひめ神あり▲神がまの
表もいどの社のあぐーかかぬやすー神がまのり
れ下あひちりしとておをるものところかとぐ燈のそし
●た右また二すあり右れうこゆけへ▲赤割屋かとぐ
まりのの勅使つとあさくがふ後人の勅使せしるおなり
●たをねば▲後人の勅使むうーいぶらのをを暖いどれん
れはるづけこり、その後かまをそのらに勅使のた右のつ
つられうー板お新をばぬとてかのふぢらさうり
とをけしてあぐくつーとるうー「まよまぶつらとくも

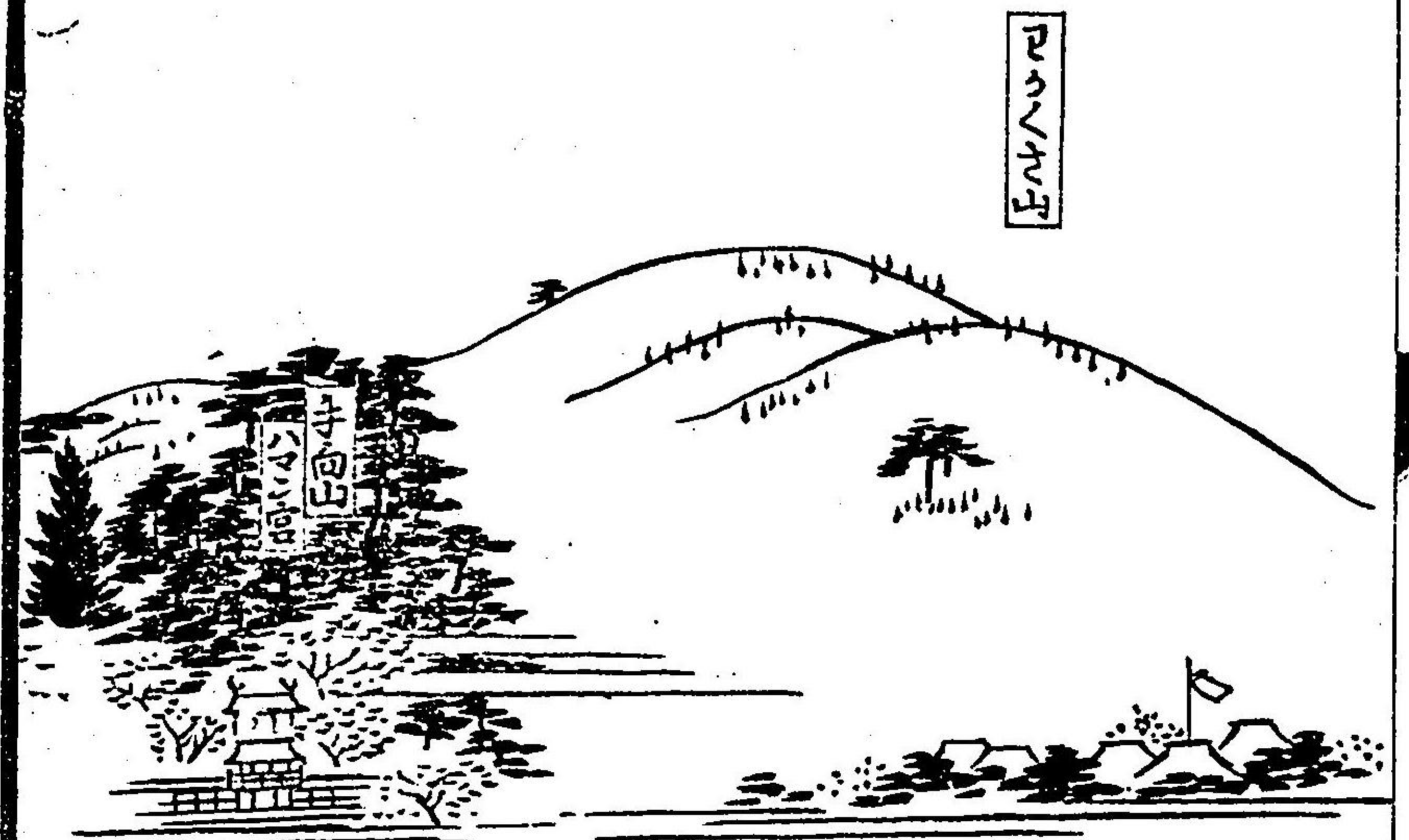
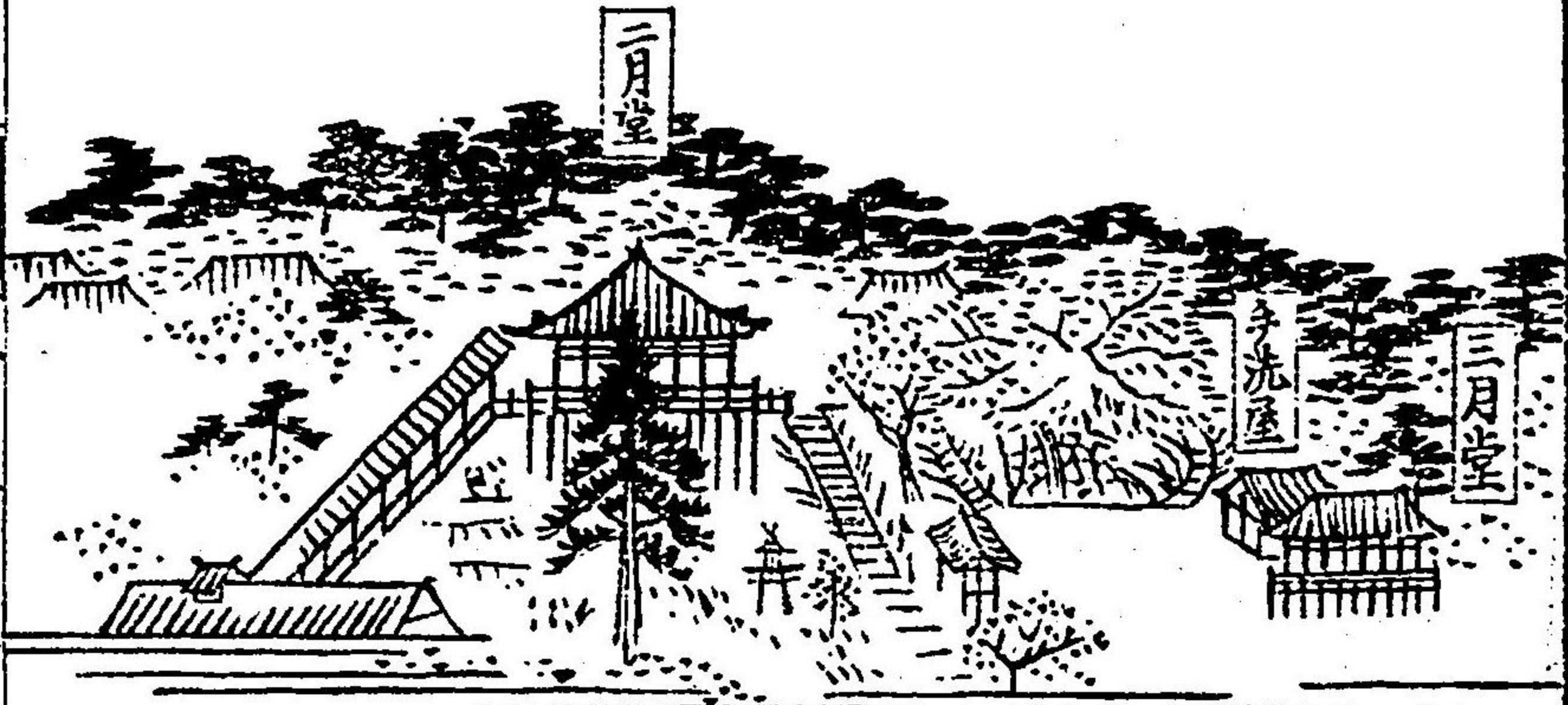
んせよふぢれりいのををねくうげ▲かとぐ神社とと
るのことの社とつふたをるんいんいんをくさうらふ
あり、この田ひこの神をまわるとぐ地主の神なり
▲あをいさい●せしるのはー●るうまらら●かとひ
をーに上るのことの社のまへにあり▲おの屋、こくや
ごてんのこをらう方なり▲三十八本社同たの方にあり
▲紀伊社、同所のせくじあり、ひのくまの神つとけるの神
つまはひめの神あり▲春日宮あめのせくじとせしる
とあつひ神、一条院の神、ちやうほうめ年三月二日
あつげんるうこれと大宮の二のほ殿へうつー
まじりしと、そのら、岩屋天皇の神、あつひ神、あつひ
二月二十七日この新殿をつくり遷すあり、あつひ、あつひ

元二年九月ナニ百祭礼にじまひ、そのころくま
 一やうの中よりナニ百を名にかり、そのころナニ百を名に
 ▲ふどやうのちり、あよひせきとらるるものちり、せりふ
 ▲あよひせき、康保甲辰に、そのころあつたあつた
 さいのちり中臣まん座のちり、そのころあつたあつた
 めーふなりとらるる ▲よまぐり、そのころあつたあつた
 祭りのちり、そのころあつたあつた ▲春日大宮南門 ●廻廊の西より三
 門あり、南のあつたあつた、中のあつたあつた、北のあつたあつた
 ▲あつたあつた、けいけい門をいへてあつたあつた、細き川を
 といふ、そのころあつたあつた、そのころあつたあつた、そのころあつたあつた
 める祭りのちり、そのころあつたあつた ▲あつたあつた、そのころあつたあつた、そのころあつたあつた
 より、はつたあつた、そのころあつたあつた、そのころあつたあつた、そのころあつたあつた

ちははし、幣をさそまひるふなり、神のあつたあつたあり ▲春日大宮
 宮幣太社二階橋門南向あり、一の階殿をけり、つられと
 こと、二の階殿をけり、三の階殿をけり、そのころあつたあつた
 四の階殿をけり、そのころあつたあつた、そのころあつたあつた、そのころあつたあつた
 祭典二年ナニ百九月にせんと、祭典に天明天皇嘉祥三
 年九月に中臣ひでとらるる、そのころあつたあつた、そのころあつたあつた、そのころあつたあつた
 祭典天皇祭典に、そのころあつたあつた、そのころあつたあつた、そのころあつたあつた
 祭典あり、そのころあつたあつた、そのころあつたあつた、そのころあつたあつた、そのころあつたあつた
 つねの日も、そのころあつたあつた、そのころあつたあつた、そのころあつたあつた、そのころあつたあつた
 あり、そのころあつたあつた、そのころあつたあつた、そのころあつたあつた、そのころあつたあつた
 祭典に、そのころあつたあつた、そのころあつたあつた、そのころあつたあつた、そのころあつたあつた
 祭典のちり、そのころあつたあつた、そのころあつたあつた、そのころあつたあつた、そのころあつたあつた

▲これより東方寺境内八町四方より寺領二百石不慮と
 坊舎ニテセリともハテある兼ふ華嚴を祀す南都七古寺の道二
 ▲十と重石塔塔海へ山社のそのあり、聖武天皇のおん
 たりかるとおもふなり ▲執造の屋同ふれあり
 ▲ごまお同ふふとやうやう玉のごぬあり ▲法華をけん
 さく隠鏡を申し世不三層等といふ天平五年良弁僧正の
 こんりうの孫百重兼平の孫ふつり大経をいしとあるふく
 うけんさくくわんおん、胎土日光佛、胎光佛、ぼんてん
 とい志等々、冥王、みらくちんぞう、皆の作、天平十二年聖武
 天皇聖平の御代にして高僧におのけいじんをさうせうせられ
 たり ▲執念到神じろんぶありひびありてうぐん僧正
 ねんち佛之天皇聖年中平のまきとらと乱のそにい佛塔と成

ままかどいささしころりせりとたん世ふ塔の宮との縁
 起の流たり ▲二月堂おろす土面親音天平勝安三年
 有言忠和尚かどた寺のつりけり入りて都率の内
 院へ修行九院、唯礼す土面のけいおとごん志もとるふあり
 光心親音院と号び、新念和尚その修行法を教へ
 人中におもふべしとおかじし、志のきども、おん親
 音おつーまきさずばーのーがはしとつおやうのいさく
 ままをいさくして執濟せをせおんおんぞ、さうり玉
 いらんそののら浪花はふりあさくせん一向い
 こんせいとくしんわんぞう、百目をうりへて、ほいよ
 志等しんのナ一面くわんぜおんふぞうくせんより
 閑伽蓋にのりさうりあふりけのあつらなるあ



二月堂

寺向山

三月堂

洗心亭

大仏

大仏殿

南大内

唐山

あまのふみ

このふみはあまのふみ

あまのふみはあまのふみの

神やまのふみ

ふみはあまのふみの

二月堂

あまのふみ

あまのふみ

二月堂

あまのふみ

あまのふみ

あまのふみ

あまのふみ

此のくわんせんといふすなをらむに安んじし天平御前
 四のより行法をいまりをれよりまひ移し二月朔日より十四日
 ぶらふ年のつらさす行ふなり今三月一日よりをじまうす
 におもまきげんおしほしてさんけい御ふ終す今の堂の音
 九の遠敷なり▲遠敷の社堂のにお方なり▲をんどこの社
 堂の南の方あり▲こし不神食堂のうしむさんなり▲あり
 井よりこの井といふお別遠敷の井よりづいををら
 べしよしあめしぬふまもたぬの物器中より飛
 ぶる物より甘熟したるぶををててあり井といふす
 ▲橋もあり井のまの方あり▲三昧堂、世に四月堂とい
 切鏡ありあまのい之治安元年六月の堂いん
 今の堂いとの再造之▲良糸杉、らべん像にお摸のむれ

人なり二才のしら就ふとつたれてこのふをてはしお育てま
 とも義測像の鏡とておんてその見とまふ
 つまわりのまらあま成長きて像とてなり即良舟
 有り聖武天皇に用いらまま寺がんとこんりして
 はまれとのせり言福四日ナ月ナハナ五歳より終まり
 ▲開山堂二月の下の下にあり良糸僧の本像を安んず
 東面ハ言免和尚の本像とらるべんありつけのくわんせんを
 かんらん▲念佛堂、ちがねのまにあり、地鏡とてかん
 ふらまのどののかの内の内つて女といつたもの部をま
 なくこへまもつてこれづんずい磨きて刻める長一寸の
 地鏡とて有りき後業坊というけては像の腹にお作りま
 たりまて極ふよな地鏡といふ▲石巻を、まらまの像に

今の十八人だかえ縁宮年の造立なり▲般若寺をん之ド所
 あり入アツきり寺領ニテス、西寺のまろト之 師明天皇の
 みまのふよりて、まのむのいづくは河をんやだてつてその
 えまうせつその後天平の比がんとなる 流石に後とむぐの火
 さいふかりを僅ふのころのく本宮文殊大士なり●十三級塔
 言て五丈余、聖武天皇宸筆の大まんふやさやうとおせしり
 ●ろく門のぐいさが天皇宸筆といひつてふ●よりあり、聖
 武天皇をせめふさやうびつりつ▲是より西ふえ四天皇えん心
 天皇のみまことあり▲まゝ名ドよりそののたふとまゝし
 ▲まゝろさ橋 おしあげ所ありつてくひをーこれなりとま
 ば良 ころわろく人めとまゝくむのあつてまゝをまゝとま
 ▲くと井坂、まゝろくまゝとまゝろくみまゝのあはとまゝ

▲これより無福寺境内、四四方、志じ、法相宗とて寺領
 二万二千百十九石余、寺務職、一乘院宮、大乗院門、法
 五家の隠家なり、坊舎百十餘、この寺はじり山城、小
 郷あり、天智天皇八年、藤原公のまゝ人まゝして山階寺と
 して、後、白鳳、えんまのたをふつて、麻阪寺といふ、洞
 この地ふつて、無福寺といひ、まゝ春日寺といひ、氏寺とい
 無福寺の二つして、まゝか、ん備、まゝり、も九回の大柴
 ふかり、まゝろくまゝのまゝのまゝ▲まゝ橋、まゝんがくろく
 うらふあり、この地まゝをまゝあつて、まゝまゝまゝまゝ
 まゝのまゝのまゝまゝのまゝまゝのまゝまゝのまゝまゝの
 ▲大ゆや、まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ



明治廿六年三月十日印刷
全 年同月十日出版

定價金八錢

原著作者 故繪圖屋莊八

增刪者 奈良縣士族 塚田武馬

奈良縣大和國添上郡奈良町
大字南苗田十六番屋敷寄留

印刷兼發行者 全縣平民 筒井梅吉

全縣全國全郡全町大字
雜司百二十番屋敷住



025574-000-3

特32-754

奈良名所記(改正図入)

絵図屋 莊八/著

M26

ADC-3065

